

東京冀北会会報

東京冀北

第26号



東京掛中・掛西同窓会会報

東京冀北会のホームページをもうご覧いただきましたでしょうか？

東京冀北会では、昨今の情勢を鑑みて、若い人達との接点としてホームページを開設できればと望んでいたところ、今年の幹事年である高二十四回の橋詰氏がいろいろ検討して下さい、「最初から完璧なホームページでなくとも、まず開設してみよう」と申し出てくれましたので、全面的にお願いしました。携帯も余りうまく使いこなせないアナログ人間の私ですが、とても嬉しく思っています。

ホームページの開設にともない若い人達に掛川西高の同窓会である東京冀北会の存在を少しでも知って貰い、一緒に活動していくことが出来ればとても素晴らしいことだと思います。ただ現在の年一回の総会だけの東京冀北会の活動では少し勿体ないような気がいたしております。



東京冀北会会長 中山 紀子 (高十四回卒)

東京冀北会「ホームページ開設」について

第25回東京冀北会総会・懇親会会計報告 (2013.11.9)

出席者	会員 97名
	来賓 12名 (掛川西高等学校副校長他 11名)
計	109名
有料出席者	7,000円×87名(609,000円) 一般参加者
	4,000円×3名(12,000円) 特別参加者
当日年会費納入	3,000円×59名(177,000円) 一般会計 収入扱い
祝儀	11件
寄贈品	赤岩 覚様 (高10)、竹原繁男様 (高16)、 落合潤一様 (高23)、山村十吉様 (高23)
収入の部	
總會一般参加費 (7,000円×87名)	609,000
特別参加費 (4,000円×3名)	12,000
祝儀	110,000
計	731,000円(A)
支出の部	
パーティ費 (サンミ高松・看板費含む)	616,470
諸経費 (景品、写真、来賓みやげ等)	62,398
計	678,868円(B)
差収入 (A) 731,000 - (B) 678,868 =	52,132円
	(余剰金 52,132円は一般会計に繰り入れ)

平成25年11月20日

東京冀北会 事務局長 山崎 進

平成25年度東京冀北会収支報告

平成25年4月1日～平成26年3月31日

(収入) 前年度繰越金	437,678円
年会費 (郵便振替分)	489,000 (163名)
” (銀行振込分)	12,000 (4名)
” (現金納入分)	177,000 (59名)
總會懇親会参加費	621,000 (90名)
役員・幹事会費 (個人負担)	182,000
雑収入 (祝儀・預金利息)	110,003
計	2,028,681円 (A)
(支出) 印刷費 (總會通知、会報、宛名シール、封入作業費他)	492,870円
總會通知郵送費 (1,347通)	107,760
總會返信後納費 (307通)	19,955 ※1
總會・懇親会費	678,868
会合費 (幹事会・役員会等)	215,500 ※2
出張・祝儀費 (掛川・浜松總會)	70,000
通信物流費 (郵便、宅配便等)	31,740
事務費 (事務用品、管理費等)	68,836
計	1,685,529円 (B)
(収支残高) (A - B) =	343,152円 (次年度繰越金)
*1: 總會出欠はがき返送料受取人払い。 *2: 役員・幹事会は個人負担	
資金管理 八千代米本郵便局 (振替口座)	313,865
みずほ銀行勝田台支店 (普通預金)	16,575
現金	12,712
計	343,152円

会計監査 竹原 繁男 (高16回卒)
会計監査 内田 金男 (高22回卒)

校歌

作詞 藤井金吾
作曲 堀 福寿

一、岩根こごしき天守台
その麓にぞわが校は
基定めて逆川の
榮え行くこそ楽しけれ

二、雨降り嵐すさぶとも
指してや行かむ小笠山
希望の懸を射るまでは
めげず撓まず屈折れず

六、やがてまことの敷なし
登れば榮ゆる百々錦
飾りて花の色そへよ
大和島根の山桜



編集後記

時々新幹線で帰郷するたび思うことは、木造駅舎が良く帰ってきたなと言っているみたいな気がします。

子供の頃から汽車が大好きでした。学校が終わると何時も、駅に行き日が暮れるまで遊んでいました。当時、二俣線は蒸気機関車でした。その機関車の方向転回する転車台があり、毎日一回その操作があり、それを見るのが楽しくてたまりませんでした。そんなことで汽車大好き人間になってしまいました。今はやりの鉄ちゃんの人です。

暇さえあれば、時刻表を見て、鈍行列車の旅プランを立てています。もちろん一人旅です。最近あまり遠出が出来ませんが、関東甲信越を中心に乗り鉄をやっています。特に秋の小海線、飯田線素晴らしいです。

新幹線の駅の中で木造駅は掛川駅唯一です。誇りです。何時までも大事にしたいですね。(Y記)

発行日 平成二十六年十一月八日
発行者 東京冀北会 中山紀子
印刷 懶文洋社

す。と申しますのは西高の卒業生は、様々な分野で大勢ご活躍なされていらつしやる様子ですので、お互いに気軽に連絡を取り合い活躍の場を広げていけるような交流につながっていくことができると考えております。掛川西高出身だということだけで、たとえ年齢が大きく離れている知らない方でも、なぜか親近感を覚えてしまうのが同窓生の良さだと思います。

同期生との遠慮のいらぬ語らいもとても楽しいものですが、世代を超えた結びつきが強固になればと願っています。それこそが今後の東京東北会の発展につながることを信じております。

決死の尾瀬撮影行



鈴木建雄 (高十二回卒)

今から約二十五年程前の十二月中旬、初めて真冬の尾瀬に行くことに成った。

雪解けと同時に、毎週約八年間、土日を利用して尾瀬に

もう二度と訪れる事は出来ない冬の尾瀬。この時とばかりよせばいいのにもよりの多くの機械やフィルムをザックに詰め込んでしまった事を頻りに後悔した。

しかし、そこで目にしたものは、非現実的な意気を呑む程の神秘的な光景に私は目を疑った。湿原に漂う「白いモヤのかたまり」が右に左にゆつくりと移動している。普段、無信心な私だが、この時ばかりは一瞬「神」の存在を意識した。

一日中雪景色を満喫し、日没と同時に下山開始。一目散に車道を、ただひたすら車へと急いだ。途中何度か道端に座り込み休息をとる。その度に猛烈な睡魔が襲ってくる。

友人が「寝ちゃダメ」「死ぬぞ」と脅かされながら、夢遊病者の様によるよると歩く。歩きながら「もう絶対にこんな馬鹿な事はしないぞ」と固く固く心に誓った。

やっこの思いで車に転がり込んだのは夜が白々と明けた頃だった。原にいた時間を除き実に二十二時間以上も歩いた事になる。

その後、写真展は成功し、これがきっかけとなり写真家として自信を深めたと確信している。その後、出版やテレビ出演に繋がって行く。

ところで、皆んな、シブタニケンって知ってる？。

通った。北アルプスの様に峻険な山並があるわけではなく、広大湿原が広がっていて、写真的にあまり魅力的とは言えない。だが出掛けてゆく度に、花や樹々が変化し季節の移ろいを撮り続けていた。

同行の友人は私より少し若い、ヒマラヤの無名峰6000メートル以上の登頂経験があり、登山、カメラの技術はとても優秀であった。

或る日、写真展でもやってみようか？、という話に成った。

どの尾瀬の写真展を観にいつても、春から秋までの作品がほとんどで、冬の写真は皆無であった。

何故なら、尾瀬という場所は四方を山で囲まれた盆地で、30センチも雪が積もれば、木道はすっぽりと隠れ、一歩足を踏み外せば湿原に墜り、身動き出来なくなる。まして池にでも落ちたら這い上がる事も出来ず、そのまま凍死してしまうであろう。夏とは違い危険極まりない所である。それを承知での決死行である。

尾瀬に入る車道は、十月中旬初雪と共に閉鎖され、入山するには、徒歩以外に方法は無い。麓の片品村を夜八時頃出発。十時間以上かかってやっと明け方尾瀬ヶ原にたどり着いた。予想以上に遠く厳しい所へ年齢を考えると、この無謀な撮影行の目的は、「たった一枚の冬景色」の写真が欲しかっただけだった。

掛川出身で、しかも掛西OBの写真家だった。そう、写真家 渋谷 健のことはほとんどの人はその存在すら知らない。

本名 鈴木建雄 高十二回卒であることを、……。



「墓参り」



後藤 克好 (高二十一回卒)

1969年、東大の入試中止の影響など微塵の影響もなく全滅、一浪し、何とか翌年大学の門をくぐる事が出来ました。1974年卒業後、そのまま職員として勤務する道を選び、2005年に五十五歳で選択定年して現在に至っています。一般の会社ほど厳しい勤務条件ではなかったにもかかわらず、四十代の始めに過労でしばらく寝込んでしまったことがありました。そんな折、何故か急に高校一年から大学入学の頃まで続けていたオランダのペンフレンドの女性のことが意識に浮かんで来ました。多分、気弱になっていた所為で昔の楽しい思い出が蘇って来たのだと思います。住所も変わっているでしょうから無謀と思いつつも、二十年ぶりに手紙を書いてみることにしました。ところが、何と一カ月以上過ぎた頃、昔のままの淡いブルーの封筒が届いたのです。宛て名の文字も見覚えがあるものでした。急いで中身を読み進む内に、その手紙が彼女の母親からのものであるこ

とが分かりました。筆跡が似ていたのも領けました。そこには、私の手紙が住所を転々としてやつと届いたということとともに、こう書かれていました。「私の娘は今、あなたを空から見下ろしていることでしょう」と。私は、その手紙で彼女がボーイフレンドとイタリアを旅行中に事故に遭い、十九歳で亡くなっていたことを知ることとなりました。その後、彼女の母親とは何度か手紙の遣り取りが続きました。そして、それから約十年後の2000年、妻と共に彼女のお墓参りに行くことになりました。ドイツ国境に近いナイメーヘンに向かったのですが、ちょうど大きなイベントがあつて市内のホテルが取れず、現地の知り合いに頼んで郊外に予約してもらいました。お墓参り当日、彼女の母がホテルにやつて来ました。不思議そうな顔でした。それもそのはず、そのホテルから彼女が眠る墓地は、車でわずか三分程の所だったので。墓石は彼女とボーイフレンドが寄り添う形で作られ、友人が置いたのでしよう、小石で彼女の名前、JOSKEとありました。更に驚くことがありました。宿泊していたホテルのわずか百メートルほどの所に彼女のボーイフレンドの母親が住んでいたのです。こちらも訪問し当時のことを話すことも出来ました。これが全くの偶然なのかそれとも何らかの「意思」が働いた結果なのか、大袈裟に言えば、私の人生の不思議の一つです。

「科学の行く末」



榎 葉 三代司 (高二十四回卒)

曲がりなりにも科学をなりわいとして生きてきた身として・・・謎、そして科学を取り巻く社会について挙げてみたいと思う。

人間をはじめほとんどの動物の生命は、たった一つの精子と卵子が結びついたたった一つの受精卵細胞ができることから始まる。最初一個だった細胞はやがて二つになり四つに分かれて八つに増えて・・・と細胞分裂を繰り返して増えていく。そしてやがてある部分は手となり別の部分は足となりまた骨に分化して身体を構成する組織として個別に成長を始める。たった一つ受精卵から生命が誕生していく・・・何と謎めいたことか。この謎に対して京大の山中教授らが人工多能性幹細胞いわゆるiPS細胞の作成に成功しその謎の解明の取っ掛りを与えてくれた。一般には万能細胞と呼ばれ皆さんもお耳にしたこともあると思う。このiPS細胞は広く世界で実証されその研究の成果に対して山中先生はノーベル賞を

受章された。ところでこの話題に関連して、最近では理化学研究所の小保方博士らがSTAP細胞に関する論文を発表し世間を大いに騒がせる種となっている。STAP細胞とは、先に記した万能細胞を極平易な操作を経て簡単に作成できるという事実ならば画期的な発見である。その内容が余りにも画期的だったため俄然激しい論争の火種となり不幸にも犠牲者まで出してしまった。思うのであるが、その発見の真偽はさておくとしても世間特にマスコミはこのような最先端の研究に対してどうしてこうも結論を急ぎたがるのだろうか。最先端の研究のその是非を問う見識・力量のある者がいったい世の中のどこにいるのだろうか。思い起こしてみるがいい。コペルニクスの地動説が中世になってやつと認められるまでには実に千数百年の歳月を要したのだ。いくら科学技術の発達が早くなったとはいえその是非について結論を急ぎすぎている。門外漢はもつとアウトサイダーとなって息長くその研究の行く末を見守ってやるべきだと思えてならない。また理研の対応にも憤りを強く感じる。私は科学の世界に身を置いていた当時理研だけは良識の最後の砦だと思っていた。それが今回の騒動に対し、理研は一科学者に責任を押し付け謝罪会見まで開くという、余りにも世俗の目に屈したその対応には深い失望を覚えている。

犠牲者が抱えたであろう苦悩を思うと胸が痛む。

科学とは当たり前ではあるが事実を積み重ねていく学問であつてそれは推論と検証の繰り返しで成り立っているものである。そして一つの事実が実証されれば必ずみ算式に次の推論が湧き上がってきてとどのつまり尽きるところを知らない。事実が大切であり人は事実を前にしたときには謙虚かつ冷静になるべきである。また検証のための手法は近年益々高度化し時間も費用も莫大に必要とするような時代になつていく。従つて、いずれにしても自分に残された時間は余りなく私がいつか迎える「その日まで」には謎解きはされないものと思つていく。研究の第一線を退いた身とはいえ前記の謎も含めて今後その行く末には注意を傾けて行きたいと思う次第である。

さて、自分が科学者として歩む道筋の一つに高校時代があつた。私たち二十四期生は昭和四十四年四月に同窓生三百二十余名が希望を胸に学び舎の校門をくぐつた。よく晴れた春の日だったことを覚えていく。以来、未だ護岸されていなかつた逆川の水面に漂うさざなみを見つめながら三年間勉強は大変だったけれども今振り返れば部活に熱中したりして結構楽しく有意義な時間だった。私事ながら、入学と同時に何の因果か風紀委員なるものを任せられ、当時世の中は全学連一色に染まつていてそれ

いのですが」と、今年の当番幹事として出席した会合で聞こえてきた声でした。とはいえ、誰が、プロに頼めば費用もかかるし、と思つていた時、素人でも簡単にできるというサイトを見つけ、面白そうだな、作つてみようかなと思ひました。

以前、簡単に作成できるというソフト「ホームページビルダー」に少し触れたものの、面倒ですぐに諦めていた私ですが、今回は思つていたより簡単で私でも何とか形ができ、その後の更新もできるものでした。

しかし、形が何とかできて、今度は何を載せるのか中身の問題です。私は、正直今まで「冀北会」については殆ど何も分かつていませんでした。

まず、冀北会会報のバックナンバーを読んでも、そこには先輩たちが「冀北学会」「報徳精神」「初代校長岡田良一郎氏」等々、そして「東京冀北会」を作り支えてきた思いを熱く語ってくれています。次にインターネットで「冀北学会」を検索すると、掛川市のHPや、「大日本報徳社」等いろいろ出てきます。そうだったんだ、と、また今回HP作りを思い立つまで、これらの情報に触れることがなかつた自分の関心の薄さを痛感しました。

2000年に迎えた掛西創立100周年では、静岡新聞社、中日新聞社が歴史・人物史を連載で特集し、今は

が母校にも飛び火して風紀委員には放課後しばしば召集が掛かりました。そのため応援練習も欠席しがちで応援が覚えられずあの恐ろしい応援団に目をつけられ大いに怖い思いをした。

同窓会を機に少し早い新幹線に乗り掛川に着き母校を訪ねてみました。実に懐かしかったです。私たちの四十二年後の後輩たちが散見されました。

それと、同窓生というだけでどうしてこんなにも人の距離が縮まるのでしょうか？ちよつと謎ですね。また近しい時に会えることを思つてその日までしゃきつと生きていたものです。

東京冀北会にホームページ(HP)を！



端 詰 正 子 (旧姓 三枝)

(高二十四回卒)

今、私達は何か知りたいと思う時、インターネットに頼る機会が増えています。

「誰か東京冀北会のホームページを作ってくれるとい

新聞社のサイトでそれらを閲覧できます。内容が充実していて母校を知る上で大いに参考になり、編集者の尽力に感謝です。地方の高校ではあるけれど、冀北学会から始まり、計り知れない努力により、国のため、社会のため、郷土のために貢献し、また野球を初めとするスポーツ、芸術等様々な分野で活躍した人物が、母校から多数輩出されてきたのです。私はこの歳にしてインターネットを通じ、我が母校の偉大なる先輩達を知ることができたといいても過言ではありません。皆さんはご存じである方も多いと思いますが、今一度、閲覧されることもなかなか興味深いのではないのでしょうか。在校時から母校に受け継がれてきたこの文武両道、質実剛健という伝統を自覚していたならば、母校に対する誇りと、そこからエネルギーとパワーを得て、もっと大きな夢を抱いていたかもしれません。

また中日新聞社のサイト、人物編には同級生が二人も登場し、小説家となった一人は(その後逝去されていたのですが)当時の学園紛争を鋭く洞察していたことを知り、当時何も考えていなかった自分と比べ、ショックを受けました。「君たちにおめでとうとは言わない」とは、1969年の入学式に、新入生の私たちに向けられた三年生代表からのメッセージでした。そして彼らと教師とのマイクの奪い合いになり騒然となつていた記憶。この

時置かれていた状況について、このサイトの「アスパック闘争」や静岡新聞社のサイト「冀北の恵風 第一部歩み」の教師や生徒の回想録を読み、今になって、分かった気がしました。冀北会の会報の中でも触れられていますが、当時の在校生、教師、PTA等、受け止め方の深さは別として、それぞれの立場で、様々な形で当時の想いを共有していることに気が付きました。

次に掛川市役所のHPの「いちおし情報」も地元を知る情報が得られますし、教育委員会編集のサイトでは、一部出版物のPDFを閲覧でき、掛川市の歴史・情報を分かり易く知ることができ興味深いです。歴史昭和編の中の、とある一枚の工場の写真の提供元が私の父の会社であることを見つけ、米寿を迎えた父にそれを伝えた時、何か不思議な縁を感じました。皆さんも身近な風景や写真、人物、資料等に出会えるのではないかと思います。

これらのサイトはできるだけリンクしましたので、皆さんもご覧頂けたら幸いです。私が呑気に都会生活を送っている間、これらの資料もそうであるように、行政はじめ様々な地域の活動で地元を支えて下さっている方々への感謝の気持ちでいっぱいになりました。

またHPについて、電話やメールで中山会長さん、事務局長の山崎さん、幹事会の先輩、浜松冀北会の先輩の皆様、いろいろと助けて励まして頂きありがとうございます。

東京冀北会役員改選

昨年十一月九日に行われました、第二十五回総会で二年に一度の役員改選が行われ、次の方々が新役員に選出されました。

会長	中山紀子 (高十四回卒)
副会長	小関哮司 (高十四回卒)
副会長	遠藤義昭 (高十六回卒)
副会長	森田重敏 (高二十一回卒)
副会長	伊与部みち子 (高二十一回卒)
会計監査	竹原繁男 (高十六回卒)
会計監査	内田金男 (高二十二回卒)
代表幹事	鈴木正具 (高十九回卒)
事務局長	山崎 進 (高十二回卒)
事務局補佐	落合潤一 (高二十三回卒)
事務局補佐	山村十吉 (高二十三回卒)

●第25回記念 総会・懇親会●



ました。

はじめは事務連絡係くらいかなと、還暦の学年に回ってくる幹事を受けてしまったのですが、同窓会での講演や会報への寄稿を快く引き受け、メールリングリストで支えてくれている同期の幹事のメンバーはじめ、八月開催の掛川での同窓会にて四十二年ぶりに温かく迎えてくれた地元の掛西の同級生、手紙を下さった恩師、そしてメールや電話で久々に連絡をとることができた同級生、多くの方々とお会いして嬉しく思いました。「同窓会も楽しいですよ」と、若い世代の人たちにもお伝えしたいと思います。

私たちの同期も、東京在住者が連絡を取り合うことは少なかったです。ふと高校時代を思い出した時に、故郷に触れ、ほっとするようなHPにできればと思います。HPに関心のある方、どんどん情報をお寄せ頂き、情報を交換しながら、一緒にHP作りに参加しこのサイトを育てて頂けませんでしょうか。それこそ「東京から掛西の灯りを消したくない」ですね。どこかで初代校長岡田良一郎先生はじめ先輩達が見守ってくれているのではと、想像を膨らませています。

増田 泰次 中二十九回(代筆)

いつもご連絡有難うございます。(娘代筆)父は十月十九日に九十九歳になりました。近くの老人ホームで生活しておりますが、頭はしっかりとありますので、掛西の話をすると喜ぶと思えます。六十代の頃は確か甲子園に応援に行つた事もありません。来年は頑張つて欲しいですね。

伊藤 太平 中四十一回
皆様ご無沙汰しています。お陰で病氣には縁がありませんが、老齢の遠方の外出は控えさせていただきます。会がますます発展する事を願っています。

中道 正定 中四十一回
病院と近くなり、入退院を繰り返しています。

堀池 有 中四十一回
今年はお骨に鞭打つて出席したいと思えます。相変わらず左足の不具合で杖をつけて行きます。

石田 武 中四十四回
男子平均寿命を四歳超えましたが、お陰様で月二回のゴルフを楽しんでいます。

笠原 久嗣 高三回
いつもご連絡いただき恐縮です。六月掛川ホテルで開催された同期会で大変お世話になりました。

藤江 哲夫 高十二回
今年も春は遠州横須賀の祭りに参加し、夏は高校野球で、もしやと気を探み、秋は東京東北会総会にも何とか出来そうです。幸せです。

安齋 隆 高十四回
春の選抜で地元小山台をパブリックビューイングで応援、夏・静岡大会のインターネット情報に手に汗を握り、若き日の甲子園での野球応援が思い出された年でした。

橋山 高昭 高十四回
足腰痛にて運動不足を痛感しております。当日はwalkingを兼ねて参加いたします。

竹原 繁男 高十六回
アサヒ叩きに合っています。ピンチをチャンスに変えるよう奮闘中です。(朝日新聞販売店主)

鈴木 知子 高十五回
健康なうちに、興味を覚えたものには、積極的に触れるようにしているため、スケジュール表はいつも何か入っていて充実した毎日です。これが健康でいられる秘訣かと、自己弁慶している今日この頃です。

坂井 吉男 高十九回
同窓の皆様とお会い出来る事を楽しみにしてましたが、残念ながら欠席させていただきます。HPが開された由、益々の充実をしたいと思います。

鎌田 由松 高四回
歩行不自由のため欠席させていただきます。ご盛会を祈ります。会費は銀行振込で送りました。

川島 常雄 高四回
毎回ご連絡有難うございます。都心に出る事、自分では大丈夫と思つていますが、家族が心配しますので、欠席させていただきます。

山崎 鏡子 高四回
昭和二十七年上京、看護師として五十五年、五年前に離職し、今は当地自治会老齢者の会で楽しく遊び、元気に独居生活しております。

大村 光助 高五回
いつの間にか傘寿に到達してしまいました。人の一生が「つかの間」のものであることを、想われないでいられません。

小原 賛治 高六回
年間を通じての心積もり、仕事40%、趣味30%(家庭菜園60坪)、家庭サービス30%(旅行、外食、音楽会、買物、ドライブ、映画・・・)

伊藤 卓三 高七回
元気で過ごしています。県大会決勝戦で敗れたことを非常に残念に思っています。次を期待しています。

塩崎 武良 高七回
囲碁会、ゴルフ会にはお付き合いで参加しています。東北会も知らない人ばかりで困っています。七十八歳の老人です。

内田 金男 高二十二回
東京東北会のホームページが開設され、今後益々会の情報が発信され、そして共有され身近なものとなるでしょう。

武田 恵子 高二十四回
掛川東中の同窓会と同じ日になつてしまい、大変残念ですが出席出来ません。堀内邦彦氏に宜しくお伝え下さい。

原田 誠一 高二十四回
定年後ももう少し同じ会社で働く予定です。年一度帰郷で故郷に戻る程度になつてしまいました。今懐かしく高校の時を思い出しています。

堀内 邦彦 高二十四回
初めての出席でしかも講演をさせて頂きます。よろしくお願ひします。

常世 佳江 高二十五回
来年度は二十五回生の担当と伺いました。残念ながらお手伝い程度しか出来なない状況です。又ご連絡させていただきます。

野川 雅枝 高二十六回
時々掛西の先輩が尋ねて来て下さいます。有り難いと思つています。(日本橋蔵伊豆総本店)

茅野 千鶴子 高二十七回
二〇一一年より始めた弓道にはまっております。現在三段で、さらに四段をめざして頑張ろうと思つています。会員の中で、弓をされている方はいらつしやいませんか。二人の子供も独立した今、自分の時間を大切に楽しんでいきます。

川村 弘史 高八回
喜寿を迎え年相応に痛んで来ています。が元気にしております。ポラントイア活動で地域の方との交流を楽しんでいます。

樽松 靖彦 高八回
お招きいただき有難うございます。当日は浜松東北会総会があり、そちらへ出席いたしますので、今回は欠席させていただきます。ご盛会を心よりお祈りいたします。

田中 義朗 高八回
バスケットボールシニアリーグ戦とかち合っているのでご返事が遅れました。東京東北会を優先して出席します。来年二月は静岡主催で熱海網代体育館で全国大会があります。

大井 敏子 高九回
毎回興味深いテーマでの講演に感じ入っております。今回も時宜を得たお話と存じますが申し訳ありません。欠席です。

齊藤 正巳 高九回
過去の自分は恥じる事ばかり。六十七歳の時、中国語をやってみようかなと思つて一、二時間の教室に加えてもらつた。十歳頃から現在に至るまで中国の歴史書は愛読書です。二〇一二年九月に十二日間、二〇一三年九月に十四日間北京一人旅。今年九月に十五日間西安に一人旅を自分で計画し、HISに手配して貰いました。少しだけ達成感を味わいました。

花島 美喜子 高九回
高九回卒は九月初め関東圏が集まり、

石井 礼子 高二十八回
来年の夏は甲子園の出場校に名を連ねていることを期待しています。

栗原 勝治 高三十一回
毎年案内を頂き有難うございます。「歳えよう若き日を」の校訓が、ずつしりと心にのしかかってくる年齢になつてしまいました。「今日は、明日のために!」

大村 信夫 高四十五回
会長中山紀子の物です。よろしくお願ひします。当日は私以外にも二名参加です。

濱本(高須)沙知子 高四十八回
当日浜松東北会の司会でこちらへ行くため、今回は欠席させていただきます。今年にはテニス部の先輩が出席との事で、東京東北会の皆様にごお会いしたかったです。残念です。

中川 琳 高五十九回
初めまして、二〇〇七年度卒です。現在静岡新聞東京支社勤務です。当日は取材もかねて参加させていただけたらと思つています。

馬淵 俊郎 中三十五回卒
平成二十六年三月二日逝去

竹内 辰雄 中三十八回卒
平成二十五年十月二十日逝去

お変わりなく元気な方々にお会い出来る楽しいひと時でした。この指とまれと指を立てて下さる方がいないと集まりにくい年齢になりました。

勝保 保 高十回
二〇〇五年アメリカ旅行中に脳梗塞にて倒れて以来九年前、関東各地の温泉病院施設にてリハビリ中です。

鈴木 智 高十回
毎日孫の小学校の「子供見守り隊」の活動をして元気に過ごしています。

高木 勇 高十回
今日頃から健康管理に努力しています。体力はかなり弱つてきています。

野末 榮一 高十一回
孫守りなど共稼ぎの娘夫妻家族を支援中です。非力ながら少子化の防波堤役です。

藤田 敏 高十一回
家内が両膝関節手術等のため妹の住まいがある八千代市(千葉県)へ移転して参りました。

中川 春彦 高十二回
体調が思わしくなく欠席させて頂きました。左足が歩けなくなり四月、色々と渡り歩き病院を渡り歩いていますが良くなりません。

逸見 伸夫 高十二回
いつも欠席ばかりで申し訳ありません。本年も地区の行事と競合しております。七十歳を過ぎ、地区の役職は退きたいと願っておりますが、思うようになりません。

東郷 和英 中三十八回卒
平成二十五年十月二日逝去

菅沼 三郎 中三十九回卒
平成二十五年十一月十日逝去

戸塚 弘一 中四十回卒
平成二十三年十一月逝去

村松 孝一 中四十四回卒
平成二十六年四月二日逝去

鈴木 泰司 併二回卒
平成二十六年七月十三日逝去

内藤 芳男 高三回卒
平成二十五年三月三十日逝去

松永 隆夫 高三回卒
平成二十五年十一月十一日逝去

小栗 秀介 高四回卒
平成二十五年十二月八日逝去

酒井 修二 高四回卒
平成二十六年二月十五日逝去

泉 良雄 高八回卒
平成二十六年八月六日逝去

増田俊二 高一回卒
平成二十六年二月逝去

訃報